

# 月曜評論

毎回、国際関係や中国問題をとりあげて論ずるのが、私に課せられた暗黙の責務なのだから、本来なら、私自身、はやくから予測していた郵小平復活の問題や廖承志訪日団が投げかけた問題、もしくは、きわめて衝撃的であった先日の日米外交教書について書くべきであろうが、今回は、いま信州で論議の盛んな教育問題について、信州教育の恩恵を全身に受けながら、いまは離れた場所にある私の素人(じゆんじん)的な感想を述べさせていただきます。

□ ■ ..... □

信州教育がさまざまな意味で再検討を迫られて以来、すでに久しくそのうえ、今回は教員の不祥事が相次いだというところは、私にとっても衝撃的であった。私事に亘(わた)りて恐縮だが、全国紙の紙面にもこれらの問題のたびに、小松孝志教育長の談話がしばしば出るという最近の一連の事態にたいしては、小松教育長が私の深志高校時代の恩師であつただけに、無関心ではいらなかつた。そして、これらの問題については、本紙がこれとこの精力的にとりあけている特集記事や読者の声の特集によって、ほぼ問題が出た感じだ。

これらの記事や意見は、いずれもそのまゝな立場から教師のあり方や教育の問題を切実に衝いており、教育に賭ける県民の熱情を改めて確認させるものであつたが、一方で、要領(えんりやう)へんぼ(へんぼ)し流動する現代社会における教育と教師像(がうりやう)という視点が重ねあわせられないなり、問題は結局、主(ま)りや社会理念(しやかいれんねん)一般に還元されてしまつたような気がする。

もとより、私は、この後者の問題をながしつゝするつもりはないさかもないが、私自身、大学に籍を置いて日頃、若者たちに接し、教育について当事者

である立場から、同時に国際社会や現代日本の変化に直面してみると、まず第一に、今日における教育そのものの変化とそれに伴う教育の困難さ(こんなんさ)を指摘しな

## 現代社会と信州教育



中嶋 嶺雄

う、もともと厳しく同時に多岐岐的な人間行爲であつた。そして、私自身の体験に照らしてみても、信州教育のもともすべれたメリツトは、その厳しさと同時に柔軟性にあつたと思

もしも信州教育の危機が問われるなり、この点の退化に求められねばならないのである。したが、そのような退化を促しているのは、政治的混沌(こんごん)とアバン(無関心の機りなす現代社会そのもの)の両方(りやうほう)は、いづれもな

い。さらに、教師は、社会構造の複雑な変化のなかで、彼自身身きわめて刺激されやす(うごめ)くしやすのみにあらず、きわめて多元的かつ複雑な価値意識をもつ受け手(うけて)の場合、生徒のみならず、児童をも含む、を一手に引き受けざるを得ず、他方では、教育内容の高度大衆社会化(たうしゆしや)と相俟(あひま)つた教育内容の多岐岐(たうぎぎ)が情報(じゆうほう)・インフレーション(インフレーション)に断片化(たんぺんか)され大量に伝播(でんぱ)されることになり

いわけにはゆかない。

□ ■ ..... □

らまのらいつまでもな、教育とは本来、「學」に発する教育という語源の東洋的文脈における「ウテン」語の educate + education から education に連なる西洋的文脈においても、成人が幼体ないしは未成人にたいして知識を伝達し、彼らの社会化と人格形成を育成するとい

認識のなかで今日の教育と教師像を再建してゆくのてないかぎり、今日の教育論は、難題(なんだん) (じきょう)、道徳的な道徳律の問題に解消してしまつてお

□ ■ ..... □

い(い)ぶに考えたとき、教師に課せられた任務は重大であるが、社会全体の責任はお重大である。そもそも、わが国では、学校教育にたいする期待と信頼性が諸外国にくらべてきわめて大きい一方で、教育にはコストが必要だという代償の観念が薄(うす)く、その点のなかで、教師の自己犠牲のみが強調されてきた。そのようなロウ・コストにおいて現代の教育を考へる甘えの構造のなかで、一方では教師の質の低下が語られ、教師の不祥事が話題を呼ぶ。もしもわが国が、国際化時代の教育を考へるならば、この点で現行の教師の給与は三倍増すべきであり、そのようなコストにおいて、教師は洗練された生活環境のなかで、厳しく自己を鍛え、社会は教師を重んじて厳しく見守つてゆくべきであらう。そして、学校教育の今日の最大の欠陥は、私が大学で新入生にたいして話した(はな)した通りであるが、教えられるべきことを学生が知らな(し)らな言ながら、一方ではあまりにも多く生徒に教えず(しや)すことにある。

□ ■ ..... □

私が勤める東外大の学生たちは、語学にがんじはも、とても高い水準にある学生たちであるが、「私の 国際関係論の講義 of Payments」を Balance of Payments として答へられた新入生は一人もいなかった。この事実をどうして受け止めるべきか。

これではなんのためにあれほどの時間と努力を費やして英語教育がなされているのか、がく然とする次第である。教師も生徒も父兄も、社会が複雑化すればするほど、もつと心と時間に余裕をもたねばならない。現代社会において、教育の真の厳しさ(げんじつ)と柔軟性(らんぜんせい)は、かたして復権し得るか。これこそ、今日の教育、とくに信州教育につきつけられた大きな課題であるように思われる。(東大助教)